

書評

原水民樹著

『保元物語』 系統・伝本考

早川厚一

院生時代、机を並べて互いに研鑽しあってきた「名古屋大学軍記物語研究会」の仲間も、あれから半世紀近くの時が経過し、まよめの時に入ったようである。弓削繁

『六代勝事記の成立と展開』（風間書房二〇〇三・一）が先駆け、今井正之助『太平記秘伝理尽鈔』研究』（汲古書院二〇一二・二）、長坂成行『篠屋宗嗣とその周縁』近世初頭・京洛の儒生』（汲古書院二〇一七・二）が続いた。いずれも江湖の好評を博した著作である。

そして、今一人が、今回紹介する原水民樹である。今回の著書は早くから多くの人々により待望されていた。

遅すぎた感はあるが、とにかくやっと出た。私も、ことある毎に出版を慫慂したが、なんやかやとはぐらかされるばかりであった。が、ある学会に出席した時、和泉書院の社主廣橋研三氏から、ようやく原水さんの著書が出ることになりましたとの報告を受けた。その時の廣橋氏の満面の笑みが忘れられない。皆から出版が待望される

ような研究者になりたいと切に思った。

今回の書は、まさに原水氏の執念の書である。そのきっかけを作ったのは、「あとがき」にもあるように、長坂成行氏なのだが、彼から叱咤激励にも似た質問を受け調べていくうちに、面白くなり、研究の虜になっていったようだ。付録の『保元物語』現存写本目録』に、「原水蔵」と紹介される写本は六本を数える。とにかく、現存する『保元物語』諸本や異本には、何が何でも目を通すのだという、鬼気迫る執念のようなものを感じる。院生時代は、常に体の不調を訴え続けていた氏からはとても考えられない執念が感じられる。時折いたたく手紙や、電話口から聞こえてくる原水さんの声は、いつもと全く変わらないのだが。

これまでも、原水氏からは、ほぼ総ての論文をお送りいただいていたのだが、『保元物語』諸本の内でも初期

諸本にしか関心を持っていなかった私は、関連する論文は何度か読み直していたものの、それ以外の論文は、斜め読みをして、結論部分を確認する程度であった。しかし、今回の書評の話をいただき、改めて総てを通読して今更ながら確認した。『保元物語』のみとは言え、あらゆる諸本・異本の網羅的調査のため、全国各地の文庫、所蔵大学の図書館等に足を運び、写本や刊本を見し、あるいは紙焼き写真を確認したりと、大変な作業の連続でありながら、その成果は決して大きくはないことの方が多かったであろうこと、故に原稿化されたものは調査の内の一部でしかなかったであろうことを実感した。こうした研究は誰しもがなし得ることではなからう。『保元物語』に対する情熱ばかりか、それ以上にとても多くの時間を必要とする。その貴重な成果を、総て述べ尽くすことはできないが、可能な範囲内で、以下紹介していくことにしよう。

初めの序文は、単なる序文ではない。是非初めに読み進めてほしい。まず、諸本作者が改作へと駆り立てる要因を三点にまとめる。

一校訂 二検証 三いわゆる文芸的意図に根ざす改作
この要素のいずれに、より比重を懸けるかによって、各

諸本の個性が決まるとする。その後、『保元物語』諸本の研究史が簡略にまとめられた後、大半の説明は、犬井善壽の一連の諸本論について費やされる。本来なら、先に犬井氏により、『保元物語』諸本論が刊行されるべきであった。それ故、これまでの『保元物語』諸本論研究を原水氏と担ってきた犬井論について、詳細に検討し直されるのである。犬井氏の分類の特徴は、系統中における最善本を認定、それをもって系統名としたことであると認定、それぞれの系統名の可否について論ずる。鎌倉本を康豊本、流布本を版行本、京図本を根津本系統等と呼ぶことに対する疑念・不安が明らかにされた後、犬井分類を基盤とした新たな諸本分類案が示される。例えば、我々が今まで呼び慣れていた金刀比羅本は犬井氏の主張どおりに、宝徳本系統と呼ぶべきとする。我々も、呼称名については、もっと自覚的であるべきことを今回の著作から学んだ。以後、宝徳本系統と呼称すべきであろう。

以下、この書評では、第一部の『保元物語』系統考を中心にまとめる。当該部では、序で示された諸本分類案に従って、各諸本群が詳細に検討される。

先ず、第一章「文保・半井本系統」では次の事が明らかとなる。初めに、半井本系統に属する文保本(中巻の

みの零本）中に見られる行間書き入れ、つまり校合を本文として取り入れることによって成ったのが、現存半井本の祖本であるとする犬井の見解を妥当とする。但し、文保本が、龍門本に近い形態を有する伝本に主によっていることは確かだが、複数の親本を有し、それらの本文を適宜混合することによって形成されたと考える。以下、文保本がその形成にあたり主によった伝本を途中で取り換えたかと考えられる箇所を示し、その周辺に書き入れが存在するとする。そうした文保本文を取り込んで形成された半井本系統の行文が、重複的にかつ緊密性に欠けるとする原因を、これまでは本系統の素朴さ、構成力の未熟さに求める姿勢が一般的であったが、それと同時に、本文混合によって文脈の緊密性が希薄になり、また記述が重複的になった場合もあるのではないかとする。また、そうした半井本の本文混合の痕跡は、文保本が存在しない下巻においても確認できるとして具体的に検証をする。

そうした検証の過程の中で浮かび上がった、文保本以前に存在した『保元物語』の姿を追究する上で重要な鍵を握る伝本である龍門本とはどのような性格の本文か、次に検討される。以下詳細な検証がなされるが、結論を示せば、龍門本は、文保本や原鎌倉本をも廻りえる可能

性を持ち、かつ流布本の旧態とも繋がる姿を残すかと考えられる一方で、意改・増補の痕もあり、位置づけとしては一筋縄ではいかない伝本ということだ。そうした指摘を確認するにつけても、現在龍門本の本文の翻刻がないことが残念である。本書には、かなり長文にわたる龍門本の引用が見られるものの、願わくばその全体が確認したい。故に、御著書に龍門本の全文翻刻がないのは、いろいろな事情はあるのであろうが、残念であった。なお、注の形の指摘ではあるが、『六代勝事記』と『保元物語』との関係について、文保本形成の時点では『六代勝事記』の影響下でない異本の存在していた可能性があるとの指摘は、『保元物語』の成立を考える上で重要な指摘と考えた。また、文保本と『神明鏡』との関係を考察し、『神明鏡』の形成に文保本に近い伝本が使用されたのは間違いなく、十四世紀後半には文保本もしくはそれに近い伝本はある程度の普及を見ていたと考える。

次節の「半井本に窺われる古態性」では、半井本に、素材として利用した史・資料の姿が、物語の意志とは必ずしもかわらずに書き留められている場合のあることを具体的に検証したのだが、この論などは、歴史研究者には是非読んでいただきたい論の一つである。このままでは、歴史研究者からは、御著書は、『保元物語』の諸

本論の本として、黙殺されてしまう可能性がある。原水氏には、この論などのように、国文学研究者は当然だが、歴史研究者も必読の論が、『保元物語』の作品論の形で、まだ多数ある。まだ御著書刊行の企画の話は聞いていないが、是非まとめていただくようお願いしたい。

次の章では「鎌倉本」を扱う。史実に合致することの多いとされる鎌倉本であるが、諸系統中特に優れて史実に忠実とは言えないことを確認する。その中で、鎌倉本のみが史実と符合する二つの事例「鳥羽出家」と「為朝陣渡し」は、鎌倉本が後に他資料を用いて改正したと見る方が穏当であるとす。一方鎌倉本にのみ史実との齟齬が見られる事例が存在することから、鎌倉本はその形成に際して、史・資料を参看・利用して史実回帰を図っていると考えられるが、それは徹底したものではないことを明らかにする。その一方で記事群再編への強い欲求もあったことを具体的に検証し、例えば『保元物語』諸系統中、鎌倉本・宝徳本・龍門本にのみ見られる義憲と家貞に関する記事については、虚構と見るべきであり、しかも本来の『保元物語』には存在せず、後の変容の過程において増補されたと見るのが穏当だとす。その増補の背景には『平家物語』（あるいは『平治物語』）をも

含めて）の普及が推定されるとす。但し、鎌倉本はこうした類の虚構を積極的に生み出す伝本ではなく、おそらくは鎌倉本以前に既に生み出されていたものを鎌倉本はそのまま引き継いだと考える。また、これまでの論では、鎌倉本における矛盾の少なさが指摘されるが、これは鎌倉本が細やかな配慮によって本文の整備を図ったことによるところがむしろ大きく、古態性の論拠とは必ずしもならないことを説く。そして、鎌倉本を宝徳本の後流に据えることはできないが、両本は共通の母胎から発する関係にあり、その内、鎌倉本は事実詮索と記事再編に力を注ぐ方向に、宝徳本は、共通母胎に芽生えた抒情性を深化させ、表現の豊かさを求める方向にそれぞれ分岐・展開したのではないかと考える。

なお、鎌倉本の成立期については、鎌倉本と延慶本『平家物語』との間に同文的類似の認められる記事群があるが、この問題については、鎌倉本先行がほぼ確定したとする。但し、延慶本が鎌倉本ごとき本文をいつ取り込んだかについては、現存延慶本が、延慶年間書写本を覚一本の本文によって改訂したものであることが明らかにされた現在、応永書写の際に改訂されたものである可能性もあり、もしそうであるとすれば、鎌倉本の成立期を探る鍵としてはその意義を失いかねないとす。また、

鎌倉本に付された元奥書についても、その書写期は応永二十二年以降であることが判明するばかりで、成立期の考察に寄与するところはほぼないとする。

次に、「宝徳本系統」を見る。鎌倉本と宝徳本は、先に見たように、その共通祖本を各々の意図のもとに補改する方向で成立したと考えられる。宝徳本の特質「詠嘆的な抒情表現に富」み、「先例や典拠等をより多くふまえ、他方では貴族たちの悲運への詠嘆をもりあげる」は、鎌倉本との共通祖本の段階で既にかなりのところまで進展しており、宝徳本はその路線をさらに自覚的に押し進めたと考える。

続いて、宝徳本の世界が、『平家物語』の覚一本のそれに似通うという諸氏による指摘について、以下具体的に検証する。例えば、覚一本に見る文詞の豊穡さ、落涙描写の増加など、宝徳本に似通う性格が確かに認められるが、相違点もあるとする。また、宝徳本と語りとの関わりについては、実演の機会に恵まれなかった『保元物語』の場合、本文練り上げ要求はさほど強いものではなかったと思われるが、にもかかわらず、宝徳本のように、覚一本に近似する方向に本文の彫琢がなされたのは、覚一本へと練り上げられてゆく『平家物語』再編のうねり

に影響され、副次的な産物として生じたのではないかとする。その成立の場を当道との係わりに見てよいかは不明として、恐らくは覚一本のごとき表現世界の強い影響を受けた知識階級の手により生み出されたかと考える。

次に、宝徳本の本文を撰取・利用して成立したと考えられる①『白峯寺縁起』②『蔗軒日録』③『細川大心院記』を検討することで、該系統の成立年代を考える。先ず応永十三年（一四〇六）に作成された①が依拠した『保元物語』諸本は宝徳本のごとき本文であったと考えてよいこと、また②の記載する事柄中、『保元物語』系統間で明白な相違が見られる三例ともに、②と一致する『保元物語』は現存本でいえば宝徳本のごとき特徴を有する伝本であったと考えられる。③の宇野親治記事については、鎌倉本・宝徳本・根津本に一致していることを明らかにする。以上から、宝徳本系統の成立下限としては、①との関係から、応永十三年に置いてもよいかとする。

次に、半井本から宝徳本に至る過渡本とされる根津本系統について、近衛院崩御記事における不手際を検討する。その結果、根津本の冒頭以下の数条は主として宝徳本のごとき本文、それより後は概ね鎌倉本のごとき本文

の影響を最も強く受けて形成されていること、さらに他の箇所を検討しても、根津本形成の背後に宝徳本のごとき形態の伝本が存在したことが推測されるとする。さらに、半井本のごとき本文の大きな影響が認められることなどから、根津本はいく種類かの異本文（半井本・鎌倉本・宝徳本）の取り合わせによって形成された混合本であるとすると。これまで、宝徳本への過渡とされている現象も、実は本文混合の結果生じたものであった。しかし、一方で、根津本は、文保本の形成に与った古態伝本の姿をいくほどかでも伝えていることは確かだとするとすれば、半井本（文保本）の原態的な本文が根津本の成立に与ったかとも考えられる。

また根津本系統の成立年代については、学習院大学蔵『忠光卿記』の紙背にその本文が一部分伝えられていることが問題となる。それは三条西実隆が『保元物語』を書写した際に生じた反故の紙背に『忠光卿記』を写し取ったものである。とすれば、根津本系統の成立の下限は、『忠光卿記』の奥書文明十三年（一四八一）六月二十七日以前ということになる。また、実隆が書写していることより、該系統はこの時期貴顕の間かなり普及していたと考えられる。

次に、根津本の性格として、次の四点「一 史実性が

希薄であり、日並記としての構成意識が薄い」「二 場面場面への思い入れが少なく、筋本意の傾向を持つ」「三 全体的に抄略が見られるが、幼君を失った傳達の悲願に限っては大幅な増補を施している」「四 他系統に比し唱導色が見られる」をあげ、以下具体的に検証する。まず、一については、年次記載への関心、日並記たろうとする意識が希薄であること、人物表記についても、史実にこだわることなく自由な改変を施していること。二については、継起する事件の各々に深く立ち入り、場面をより印象的に描出しようとする意図を持たず、筋本意の物語へと変貌しているとする。三については、抒情的な記事には積極的に取り組まず、年少者の死をめぐる近臣の狂おしいまでの情念を描出することに力を注ぐとする。四については、三の指摘と無縁ではなく、これは、南北朝・室町期の軍記もの、語りものの中に見られる時宗の影響を想定できるのではないかとする。そして、一～四点の傾向からは、室町軍記を含む後期軍記の趨勢と合致しているのではないかとする。

次に流布本の性格を以下の四点にまとめる。「一 政道論の増加」「二 故事・来歴記事の増加」「三 記録の様相の増大」「四 筋本位の記述」。三・四について具体

的に検証するが、例えば三に閱して言えば、作品中に見る公文書及び書簡等は総て作者の創出と考えられ、結論としては、流布本が事実の検証に意を注いだというよりは、史実らしさを装う擬装史書というべきものとする。四については、流布本は、登場人物の懊悩や心の葛藤に係わる描写、人間の多様な描写を切り捨てているとする。以上から、作者の縁辺には少なくとも年代記・系図・補任の類が備えられていたであろう事、作者像について言えば、その背後に浩瀚な文献を擁していたとは考えがたく、その採取範囲は思いの外狭い。後期軍記との関係も考えられるが、はっきりしたことは言いがたく、後期軍記の各々の作者考証の深化を待ちたいとする。

次に、流布本を撰取・利用した著作『神皇正統録』『今川記』『北条記』を取り上げ、いずれも流布本の影響を受けていることは確かだが、流布本の形成期の考察に寄与するところはないとする。結局流布本の成立時期については、『壘囊抄』との関連から、上限は文安二年（一四四五）から天文元年（一五三二）の間、下限は近時の滝澤みかの研究により、「一五五〇〜一五六〇年前後」と限定できるとする。

次に、後三年の役に勇名を馳せた鎌倉権五郎景正に敵対したとして記される鳥海弥三郎について考える。江戸

中・後期には、景正と鳥海弥三郎の対決は広く知られていたが、そうした伝は、何時いかなる経緯をたどって生じたかを考える。そうした付会が生まれる前提としては前九年の役・後三年の役との混同が想定される。こうした混同あるいは錯誤は意外に早い時期から生じていたとする。具体的には、文保本の形成された文保二年（一一三八）の時点において、景正の武功を「カナサワノ城セメラレシ」時のこと（後三年の役）とする伝本と、「鳥海ノタチ落サセ給ケル時」のこと（前九年の役）とする伝本と、二様の異本が存在していたこととなり、十四世紀初期には、景正の武功を前九年の役でのこととする異伝が既に生み出されていたと推定される。とすれば、「鳥海ノ館」からの連想上に鳥海弥三郎の付会を想定することは可能とする。その後、景正・鳥海弥三郎対決の構図は、古浄瑠璃に至って定着する。なお、景正の敵対者に鳥海弥三郎を付会した最初の文献は、舞曲『八鳥』かとする。

次にその他の系統として杉原本を取り上げる。先ず現行説（犬井善壽説）を追認、但し、杉原本が、流布本系統のいかなるものを利用したかは不明なままだが、流布本の中でも古態を伝える写本群との類似が目につくとする。

次に東大国文本系統を取り上げる。該本については、二ないし三本の『保元物語』を基として作成されたとする現行説を追認し、その伝本の一つとして岡崎本に着目する。そして、東大国文本系統も、岡崎本と同様に、本文流動が一応終息した後に編纂・考証的意図をもって再生産された系統として捉えられるかとする。

最後にその岡崎本について考える。岡崎本は、『参考保元物語』が版本校讎の資に用いた異本の一つで、現在その所在は知れない。但し、参考本には流布本との異同の要点が記しとどめられており、それによって大体の姿が知られる。その校異を手掛りとする限り、岡崎本は古活字版第一種や古態写本に近いが、それよりは純良度の点で劣る伝本を主要な母胎として形成されたかとする。但し、ごく一部に根津本や『源平盛衰記』の本文を取り込んでおり、さらに、『台記』『吾妻鏡』の類の記録や年代記・系図類等によって増補・改編を加えてもいる。諸本体系中の位置づけとしては『保元物語』の一異本として認識すべきものだが、本文流動期の所産ではなく、諸本研究には資するところ少ない伝本とする。作成年代は、元和（一六一五〜一六二四）あたりを下限とすべきで、流布本成立後に考証的な好事性により諸資料を援用して

生み出されたと考える。

論旨は非常に明瞭であり、最新の文献も引用された最新の成果と言えよう。以下、第二部では、第一部で確認したそれぞれの系統に属する異本の書誌や伝来、それらの関係が詳細に考証される。例えば、宝徳本系統の諸本として、四十四本紹介されるが、その内の十八本は、犬井善壽論文では扱われていないものである。まさに、前人未踏の調査研究記録である。さらに第三部では、「考証本・亜流本・派生本考」として、『保元物語』を母胎として近世期に生まれた著作が取り上げられる。大変な労作である。この高い壁ではあるが、この後、誰かの手によって再び検証されねばならないであろう。

最後に、論中でも指摘したことだが、原水さんには、御著書には収載されていない『保元物語』の作品論に関する論文がまだたくさんある。やはり、後学の研究者のためにまとめるのが使命だと考える。それだけの価値ある御論だと思ふ故に切に願う。その前に、本書が多くの研究者に読まれることを願う。

二〇一六年十一月二十五日刊、和泉書院、A5判、

六五九頁、一六、〇〇〇円＋税

（はやかわ・こういち／名古屋学院大学教授）